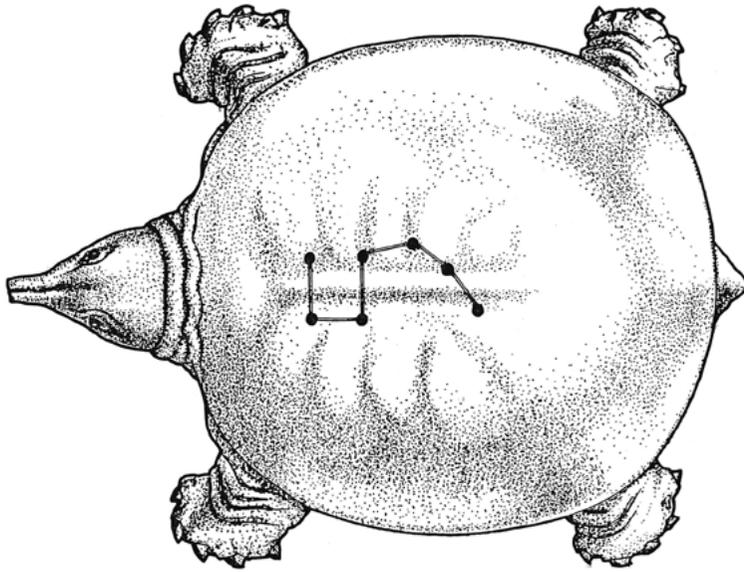


青斑石龜合子〔中倉50〕 姿



同上 背面部分

拡大2.3倍



青斑石龜合子 実測図

### 青斑石龜合子

昭和五十九年十月に実施した石製宝物類材質調査に際し、青斑石龜合子の蓋の表面に北斗七星を象どった意匠のあることが確認されたが、さらに蛍光X線分析および顕微鏡観察の結果、七個の星(丸形)は銀で表わし、星をつなぐ二本筋彫りの間に金泥を塗っていることが明らかになった。同宝物の表面に北斗七星の意匠のあることは、すでに明治十三年一月大蔵省印刷局刊行の『國華餘芳正倉院御物』所載の「青石龜合子」の図に見え、さらに昭和七年十二月帝室博物館刊行の「English Catalogue of Treasures in the Imperial Repository Shōsōin」(文正倉院宝物目録)にも原田治郎氏が銀と金線の北斗七星が、「how very faint」ながら見えると説明している。しかし帝室博物館刊行の『正倉院御物図録 六』(昭和六年四月刊)所載同宝物の解説をはじめ、一般の解説書に北斗七星の意匠について述べたものが見当たらないので、今般その存在を確認し得たのを機に、本誌に紹介する次第である。

なお『續日本紀』靈龜元年八月二十八日条に、左京人高田首久比麻呂が「背負七星靈龜」を献じ、これによって九月二日、改元して和銅八年を靈龜元年と為す旨が見える。この記事と青斑石龜合子との関係をいかに考えるかはこれからの課題であるが、院蔵の呉竹鞘杖刀や法隆寺七星剣など、刀身の象嵌例を別にすれば、器物に北斗七星を刻した例はあまり聞かれず、きわめて貴重かつ興味深い事例といつてよいであろう。(橋本義彦)

(写真撮影 山中五郎、実測図作成 木村法光)



No 2 新11 縹地唐花文錦

縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 1 新1 黃地小花葉文錦

↔ 縮尺約 $\frac{1}{3}$



No 3 新7 浅緑地花文錦



縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 5 新12 赤地唐花文錦・副文部

縮尺約 $\frac{1}{3}$



No 4 新2 白地小花文錦

縮尺約 $\frac{1}{3}$



No 7 新17 紫地唐花文錦  
縮尺約 $\frac{2}{3}$



No 6 新18 紫地唐花文錦・主文部 縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 9 新15 黄橡地唐花文錦  
縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 10 新20 赤地唐花文錦

縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 8 新21 赤地大花文錦  
←→ 縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 12 新13 黄地唐花文錦 ↔ 縮尺約 $\frac{1}{5}$



No 11 新22 赤地花山岳文錦  
縮尺約 $\frac{1}{6}$



No 14 新19 赤地唐花文錦 縮尺約 $\frac{1}{2}$



No 13 新16 赤地唐花文錦 縮尺約 $\frac{1}{2}$